
endless youth story

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

endless youth story

【Nコード】

N3049B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

転校ばかりの少女は、友達を作らない。けど、ある町に転校してきたとき、隣の席になった少年のおかげで再び学校生活の楽しさを知る。しかしまた少女は転校することになってしまった……。友達も作って恋をして、あの町は少女の青春でした。

「。。。県から来た白金千尋です。よろしく願いします」

これで何度目の転校だろう。

日本列島を津々浦々転々と・・・

さすがにもう、慣れたけどね。

「よろしくー！俺明石光紀！」

「うん、よろしく」

「ありゃ、なんか反応薄いね」

「あたしのことはあんまり構わなくて良いから」
「え」

どうせまたすぐ転校しちゃうんだ。

ここだって、どうせいられるのはたったの数ヶ月だけだろう。
だったら別に友達なんか作る必要ない。

1人でいた方が気が楽だし、落ち着く。

そうやってあたしは今まで過ごしてきた。

ここでもいつも通り一匹狼やってれば良いのよ。

授業は前にいた学校の方が進んでいて、割と楽だった。
そんなこんなで午前の授業が終わって、お昼になった。

「白金さん、良かったら一緒に食べない？」

教科書を片付けていると、女の子たちに誘われる。
けど、あたしはお弁当を持って言う。

「悪いけど、遠慮しとくわ」

教室を出る。

屋上に行つて、お弁当を広げる。

誰と話すわけでもなく、空を見つめるわけでもなく
ただただひたすら黙々とお弁当を食べる。

ここにはいつぐらいまでいられるのかなーって、そんなことを思い
ながら玉子焼きを口に入れる。

「おいしそーだね」

すると、上からひよっこりと顔が出てきた。

「はっ・・・?! あっ、あんた!」

「あんたじゃなくって明石光紀だつて」

その男の子はタンクの上から飛び降りて、あたしの前に座った。

「なんでこんなところで食べてるの?」

「別に・・・1人で食べるのにちょうど良いからよ」

「じゃあなんで1人で食べるの?」

なに、この男。

めっちゃウザいんだけど・・・

あたしがなにしようが勝手じゃない。
別にあんたにはなんの関係もない。

「ほっというてよ」

そして、またお弁当を食べる。

すると明石光紀は突然立ち上がって、笑顔でこう言った。

「決めた！俺千尋の友達1号になる！」

「は？！」

「てなわけよろしくっ」

そして、屋上を出て行った。

なんなの、あいつ・・・

人を勝手に呼び捨てにして。

それに、友達なんて・・・

あたしには友達なんかいらなの。

必要ない。

そつよ、いなくて良いのよ・・・。

教室に戻って、5限の授業の支度をする。

隣の明石光紀が愛想良く笑ってくる。

あたしは見て見ぬフリをする。

「なあなあ、ここつてどうやって解くん？」

「あたしにも分かんないわ」

「そっかー」

彼はそうやって、あたしにしつこく話しかける。

けれどあたしは冷たくあしらう。

そんなこんなで、放課後になり、あたしは帰る準備をし終えてから教室を出る。

みんな友達と一緒に帰ったり、部活に行ったりしている。
そんな風景を眺めていると、突然声が聞こえた。

「千尋っまた明日なー!!」

ロータリーを歩いてるあたしに、明石光紀が教室の窓から身を乗り出して叫んだのである。

「ばっ・・・」

人の視線が集まり、赤面する。

手を振る彼を無視して、あたしは走って学校を出た。

「ただいまー」

「お帰り、千尋。どうだった？新しい学校は」

「楽しかったよ」

心にもないことを言う。

これもいつもと同じこと。

楽しいわけじゃない。

友達も作らずただただ1人で過ごす学校生活なんて。

こんな生活がもう、何年続くんだろう。

「あ、そうだ。お隣さんにあいさつに行くお菓子まだ買ってないのよ。だから買ってきてくれない？」

「えー」

「おつりあげるから」

お金の欲に負けて、近くの和菓子屋へ行くことになってしまった。
家から歩いて10分くらいのところの、割と有名な店だ。

お菓子を選ぶ。

「あれ、千尋？」

「えっ。あ、明石光紀！！なんでっ・・・」
「ここ俺んちなんだよ」

そこには、エプロンをつけた明石光紀がレジにいた。
驚いたあまり、口がふさがらなかった。
まさかここがこいつんちだったなんて・・・

「偶然だなー。あ、なんにする？」

「あ・・・じゃあ、これとこれ」

「了解」

明石光紀は手馴れたようすで、お菓子を袋に入れる。
お金を払いお菓子を持って、店を出ようとした。

「千尋、今ひま？」

彼がエプロンをはずしながらあたしに近づいてきた。
思わず足を止めて答える。

「暇だけど・・・」

「じゃあちよつと話してごうよ！」

「え?!」

「大丈夫！父さんトイレ行ってるだけだからすぐに戻ってくるから。」

ねっ
」

そう言って彼は店の前にあるベンチに腰をかける。
仕方なくあたしも、その隣に座る。

「あのー・・・あたし、やっぱり帰・・・」

「千尋は学校好き？」

「え・・・別に普通だけど」

「俺はめっちゃ好きなんだよね」

彼はとても良い笑顔をする。

ああ、ほんとに好きなんだって、伝わってくる。
あたしにはない気持ちだから余計にそう思えるのかもしれない。

「だから千尋にもそうなっしてほしいんだ」

今までいろんな人があたしに話しかけてきた。

いっぱい質問されたり、友達になろうと言ってきたり、一緒に遊ぼうと言ってきたり。

けど、あたしはその全ての人たちから自分から遠ざかった。

「む・・・りだよ。あたしにはそうはなれない」

本心から言えば、そうしたくはなかった。

けれどそうしなければならなかった。

誰かと仲良くなることは許されなくて、許したくもなかった。

「なんで？」

「誰かと仲良くなったら・・・別れるとき悲しいから」

今までたくさん転校した。

最初のうちは、たくさん友達も作ってた。

けど、そのたび別れが惜しくなっていっぱい泣いた。

泣いて泣いて泣いて、もう涙が出なくなるんじゃないかってくらい、毎回泣いた。

そしていつしか、転校先で友達を作らなくなった。

そうすればまた転校するときも、悲しまずにすむ。

悲しまずにすむんなら、それで良いって思い込んだ。

「・・・けど、やっぱり寂しいよ」

目から涙を出さなくなったけど、心ではいつも大雨。

友達はいらない、１人で良い、そんな思いは本心ではない。

けれど、そうしなきゃいけないって思い込んでしまつて、そうでなきゃならなくなつてしまつて、いつも１人ぼっちで淋しかった。

「別れなきゃならないときも悲しいけど・・・ずっと１人でいるのは、もつと辛いのに」

はじめてもらした本音。

心配させまいと親にも言えなかった言葉。

誰かにそれを言えたことで、何年かぶりに涙を流す。

「お弁当食べるときも、移動教室のときも・・・誰も隣にいてくれないのはやっぱり嫌だよ・・・」

淋しいと思つてはいけなさと、なぜそう思つたのだろう。

泣いてはいけなさと、誰が決めたんだろう。

誰かとこんなに話すのは、どれくらいぶりなんだろう。

「俺は千尋は友達に囲まれてたほうが良いと思うな」

「え・・・」

「千尋が笑ったら絶対かわいいと思うんだ！そしたら絶対みんな集まってくるって」

「けど、やっぱり・・・」

「友達作ないってすっげえ損だぜ。どうせ転校するからとか思わないでさ、ここにいられる間の思い出を作るために楽しもうよ」

心がきれいに洗われる。

いつしか学校が楽しくないと思えたあたしに、再びチャンスが訪れた。

「うんっ・・・！」

友達ってやっぱり素敵。

こんなにも癒されるし、心が軽くなれるんだ。

しばらく泣いたあと、もう日が沈んでることに気づき、あたしは家に帰ることにした。

「・・・今日はありがと、明石くん」

「光紀でいいって」

「うん。じゃあ、光紀。また明日ね！」

「おう！」

久しぶりの笑顔で、家に帰る。

（親に「遅すぎ！」と怒られたのは言うまでもありません）

翌日。

ドキドキしながら教室のドアを開ける。

あたしは思い切って、昨日一緒にお昼を食べようと誘ってくれた子たちに話しかける。

「お・・・おはようっ」

「あ、おはよー白金さん！」

「あ、あの・・・昨日は・・・」

「あー昨日は一緒に食べれなくて残念だったね。今日はどうかね？」

「一緒に食べよ！」

2人のその女の子は、昨日のことに嫌な顔をせずに笑う。

「うん！」

こうして、ミズキと枝衣実と仲良くなれた。

隣の席の光紀は相変わらずだけど、ミズキたちともいっぱい話すようになった、ほかにも友達がたくさんできた。

たわいもないことをみんなで話すのがとっても楽しくて、あたしの顔に笑顔が戻る。

学校ってこんなにも楽しいところだったんだ。

今まで損してた。

ほんとにそう思えた。

「みーつきっ」

「おー千尋！今日も来たんか」

「だってここの和菓子おいしいんだもんっ」

あたしは光紀んちの和菓子屋に毎日のように通った。
ほんとに和菓子が好きってのもあるけど、半分は光紀に会いたいか
ら。

光紀といると心が落ち着くの。

たくさん笑わしてくれて面白いし、ほんとに良い奴なんだ。

「あ、そだ。これさっき試作したんだ」

「えーおいしそう！」

「やるよ」

「わーすっごいおいしい！これお店に出すの？」

「まっさか。俺のなんかまだまだ。でもいつかここに俺が新しく作
った奴出したいんだ」

そう言う光紀はとてもキラキラ輝いていた。

夢があるって良いな。

「出せるよ。だってこんなにおいしいんだもん！」

「うん。さんきゅー。じゃあ叶ったときは一番に千尋に食わしてや
る」

「やったー！」

友達ができて、いっぱい話をして、買い物にも行って、みんなで遊
んで。

そんな楽しいことがずっとずっと続いて、友達がいることのすごさ
を感じた。

「あ、電話だ。もしもし」

『千尋？ミズキだけど今ひま？映画のチケットあるの』

「あー今光紀んちにいるの。あ、じゃあミズキンちも来ない？！」

『あつ行く行く！じゃあ映画は明日ね。枝衣実と今から行くー！』
「おっけー」

ぜんぜんメモリのない携帯に今、クラスメートの半分以上が登録されている。

鳴らない携帯を握り締めて、来るはずのないメールを待っていたあの頃のあたしとは、もう違う。

「早瀬^{ミズキ}たち来るん？」

「うん。ミズキたちもここの和菓子好きなんだよ」

「そりゃ嬉しいわ」

何分かすると、ミズキたちが来た。

差し入れにジュースを買ってきてくれたから、4人で和菓子を食べながらジュースを飲んだ。

「それにしても千尋と明石くんって仲良いね」

「あたしも思った。噂じゃ付き合ってるんじゃないかって話だよ」

「俺ら友達1号だもん。なっ」

「そうそう！」

へえ、そんな噂あったんだ。

あたしは別に嫌とかは思わないけど、光紀はどう思ってるのかな。そう思っただけと光紀を見た。

「ん？」

微笑む光紀になぜかドキッとした。
胸が高鳴る。

「な、なんでもないっ」

どうして顔が赤くなるの？

どうしてこんなにドキドキするの？

今までに感じたことのない、はじめての気持ち——・・・

ああ、そうか。

これが「好き」ってこと。

誰かに恋をするってこんな気持ちなんだ。

じゃあ、あたし光紀のこと・・・

「・・・え？」

夜、家族で夕ご飯を食べているときに、あたしは耳を疑った。

お父さんの言ってる意味を、頭の中で理解したくないかのように。

「すまない、千尋。また会社で転勤が決まった。今度は北海道になつてしまった」

「千尋もちやんと学校のお友達とお別れしてね」

「・・・いつなの？」

「1週間後だ」

楽しい日々は、ずっとは続かなかった。

光紀を好きだと気づいた日、今までの中で一番幸せの日のはずなのに
光紀との別れを宣告された日、今までの中で一番悲しい日になって

しまった。

ここにいられるのもあとたったの1週間。
たったの1週間でここを離れなければならない。
ミズキと枝衣実と・・・光紀と離れてしまう。
もう、会えなくなってしまう。

「やだ・・・」

「え？」

「やだっ！あたし絶対転校なんかしないからっ！！！」

自分の部屋に閉じこもった。

心配そうにお母さんが部屋に来たけど、部屋に鍵をかけて入れない
ようにした。

灯りもつけずに、ベッドの中で布団にうずくまってただただ1人で
頭を抱え込んで自問自答した。

やっぱり仲良くなれないほうが良かった？

別れる日が来るくらいなら、悲しむなら1人でいたほうが良かった？
また昔のあたしに戻ってしまう。

笑顔のないあたしに、戻ってしまう。

学校へ行っても、あまり元気が出なかった。

ミズキと枝衣実にはただ体調が悪いだけと言った。

もちろん光紀にもそう言った。

放課後いつものように和菓子屋へ向かう。

店の前に立ち尽くす。

ドアを開ける勇気がなくて、やっぱり向きを返して家へ帰ろうとした。

「千尋！」

すると、店から光紀が出てきた。
びつくりしてあたしは光紀のほうへ振り返る。

「・・・なんで入ってこないの？」

「あ・・・えっと、用事思い出して」

「嘘だ」

ほかの人たちには通じた嘘も、きっと光紀は見抜いてた。
けど、きつとあたしから言うのを待ってたに違いない。
だって光紀はそういう人だ。

転入してきた日も、あたしが淋しいことに気づいてくれた、優しい
人。

「言えよ。なにがあった？」

そんな人だから、あたしは好きになったの。
そんな人だから・・・もう一度友達を作ろうと思ったの。

「転校・・・することになったの。北海道に」

「えっ」

「ここを離れなきゃいけないんだって・・・」

声が震える。

目じりが熱くなるのを感じる。

けど、涙は出したくないよ。

もう泣かないって決めたの。

友達を作るって決めた、あの日に。

「離れたくない．．．行きたくないよっ．．．」

握り締めた拳もカタカタと震える。
その手を、光紀は優しく握った。

「行くな」

「みつ．．．」

「って、ほんとと言いたい。けど．．．」

あたしも光紀も、どうにもならないって分かってるんだ。
どうにもならないから余計に悔しくて悲しくなる。

赤い夕日が落ちていって、暗くなりつつある。

冷たい風が刺してくる。

それでも、寒さにも耐えられるくらい一緒にいたいって思う気持ちは、
嘘じゃないよ。

「けど、やっぱり言う。行くな、千尋。行くなっ．．．」

そう言っであたしを抱きしめる光紀の手も、やっぱり震えていた。
あたしだけじゃない。

「光紀い．．．」

声にならない声で、光紀の名前を呼ぶ。
少しの間、抱き合っていた。

あたしは光紀にいろんなことを教えてもらった。
友達作ることの素晴らしさとか、楽しく過ごす学校生活とか
恋とか。

そんな光紀に、あたしは隣にいることしかできなかったけど
それでもあたしの中では一番の思い出だよ。

一緒にいたことが、一番の幸せだった。

笑ったり怒ったりして、そしてまた笑う日々も、2人で築いたかけ
がいのないもの。

「・・・別れは淋しいけど、でも俺は千尋と仲良くならなかったほ
うが良かったとは思わない。むしろ一緒にいられたことが嬉しかった」

「・・・あたしも」

「夢を叶えたら、すぐに会いに行く」

いつしか誓った約束。

——じゃあ叶ったときは一番に千尋に食わしてやる——

叶わないなんて思わないよ。

その頃あたしがどこにいるかなんてまだわからない。
けど、絶対に信じてる。

「待つてる・・・」

あたしの夢は、光紀と再会することだよ。

嘘だなんて言わせない。

何年かかってても、それまでずっと会えなくても・・・
ここでの思い出と一緒に、ずっと待つてる。

悲しみは思い出となって、積み重なる。

いつか大人になったときに笑いあえるようになるための、糧となる。

あたしはそれを、ここで学んだ。

— 1 週間後。

「千尋っ元気でねー！」

「また会おうね！」

「うん。ミズキも枝衣実も元気でね」

クラスメートが昨日、盛大にお別れ会を開いてくれた。
聞くところによると、発案者は光紀らしい。

『これお餞別！』

『俺らのこと忘れんなよー！！』

みんなあたしにお別れを言いながら、プレゼントをくれた。
一番最後にくれたのは、光紀だった。

『はいよ、千尋』

『ありがとう』

中身はレターセットだった。

一緒に入ってた手紙には、「これで俺に手紙書けよ！」と。
それを見たのは家に帰ってからだったけど。

でもあたしは家で、1人で微笑んだ。

うんうんと、何回もうなずいた。

そして、今日はついに出発。

土曜日だから学校も休みで、ミズキと枝衣実、そして光紀が見送りに来てくれた。

「光紀も。元気で」

「うん」

「絶対に絶対に手紙書くから」

「うん」

「あたしのこと・・・忘れないでね」

今までこの時、この瞬間が一番嫌いだっただ。

別れを惜しむのは誰にでもある感情だけど、やっぱりそんな簡単にはおさえられるものではないから。

「俺が忘れるとお思いですか？」

「あは、そうだねっ」

「千尋。がんばれ！」

けど

みんな笑顔で見送ってくれたから、あたしも泣きながらだけど笑顔になれた。

会えないことは辛いけど、でも思い出として残ってるから大丈夫。

あたしはもう大丈夫だよ。

ありがとう光紀。

この町はあたしの青春でした。

「千尋なに読んでるの？手紙？」

「うん。前いたとこの」

「これ男の字じゃない？あつもしや彼氏ー？！」

「もー、ほつといて」

北海道に来て、もう1か月経つ。

光紀からの手紙はこれで2つ目。

「へえ、枝衣実に彼氏できたんだ。あ、また試作作ったんだ。あたし食べたいなー」

手紙を見ながら独り言を言うことも増えました。（笑）

あたし、こつちで友達いっぱいできたよ。

光紀がいなくてもちゃんと笑えるし、ちゃんと楽しく過ごしてるよ。強くなったでしょう？

出会った頃より、たくさん前に進めたよ。

はやく会いたいな。

「えー、春休みになったらこつち来るの？！ミズキたちもだって！やった！！」

どうやら4、5人くらいでこつちに旅行にくるらしい。

まだまだずっと先の話だけど、でも嬉しい。

久しぶりに会えるんだ。

またあの笑顔が見れる。

あたしが救われた、あのキラキラした笑顔。

——俺千尋の友達1号になる！——

たぶん、そう言われたあの瞬間から
あたしの青春は、始まった。

時は師走。

寒さの拠点、北海道に滞在中。

日本列島、津々浦々転々々。

あたしの特技は、思い出作りとなりました。

f i n

（後書き）

youth って「若さ」や「若者」などの意味があるそうです。
ここでの題名の意味は「青春」です。

endless youth story

く終わりのない青春物語く

読んでくださった方、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3049b/>

endless youth story

2010年10月8日13時12分発行